様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４３１３

研究課題名（和文）目標階層理論に基づく他者志向的動機と自己志向的動機の統合の概念化と適応性の検討

研究課題名（英文）Examination of conceptualization and adaptability of integration of other-oriented motive and self-oriented motive based on goal hierarchy theory

研究代表者
伊藤　忠弘（Ito, Tadahiro）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：９０２７６７５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：個人のなかで自己志向的（利己的）動機と他者志向的（利他的）動機が葛藤しているか統合しているかを記述、測定するための方法を検討した。階層的目標構造の理論に基づき，複終局性（１つの行動が複数の目標に向かわせる状況）を統合、目標を満たす手段が独立していて資源を奪い合う状況と葛藤と捉えた。面接法により、個性記述的に目標とその手段を算出させて、さらにその関係を量的に評価させる方法を試みた。しかし妥当性検討のための適応指標との関連は明確に得られなかった。個性記述的方法に伴う目標と手段の内容の抽象度の個人差をどのように統制するかが今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自己志向的（利己的）動機を抑制し他者志向的（利他的）動機に従って行動をし続けることは難しい。むしろ両者を対立させるのではなく、いずれも両立させることによって、個人が長期的に社会志向的（利他的）に行動することが可能になる。個個人の動機（目標）間の葛藤・統合の様子を記述、測定するための方法を開発することによって、そのような状態にある個人をスクリーニングし、動機の統合の適応的な機能や統合させるために必要な前提条件を特定することが可能になるために意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examined the method to describe and measure whether the self-oriented (selfish) motive and the other-oriented (altruistic) motive among individuals are conflicting or integrated. Based on the theory of hierarchical goal structure, the multi-finality (a situation in which one mean leads to multiple goals) was regarded as integration and a situation in which means for satisfying the goals are independent and compete for resources was regarded as conflict. By the interview method, participants product their goal and its means in an individual descriptive manner and evaluate the relationship quantitatively. However, the relation with measures of adaptation for the validity examination was not clearly obtained. A future task is how to control the individual difference in the degree of abstraction of the contents of the goal and the means associated with the individual descriptive method.

研究分野：教育心理学

キーワード：動機づけ　目標　他者志向的動機　達成動機　目標階層理論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

「他者志向的達成動機」は，他者の期待に応えようとして，あるいは周囲の応援やサポートに対する「恩返し」を意識して個人的な達成に努力する動機づけである。スポーツ選手，芸能人，著名人らは，自らの社会的成功を「応援してくれる人のため」や「お世話になった人への恩返し」など，関係性に支えられた達成行動を語る。また大学生に対する半構造化面接でも，それまでに努力してきた経験の動機づけとして，親や家族，教師，コーチや監督，先輩，友人など重要な他者を通して語られている（伊藤,2005）。

面接調査や自由記述法による調査で明らかにされた他者志向的達成動機に対する考え方を基に，他者志向的達成動機への態度の個人差を測定する尺度が作成され改訂が進められてきた（伊藤,2004；2012）。自己志向的動機の重視，他者志向的動機の重視，他者志向的動機への負担感，他者志向的動機の利己性の認知，自己・他者志向的動機の統合，という 5 つの下位尺度は，他者志向的達成動機づけの単なる強さではなく，対照的な「自分自身のための努力」という自己志向的達成動機との関係づけを反映していると言える。

尺度を用いた一連の研究で，「自己・他者志向的動機の統合」は 5 つの下位尺度の中でも他の関連変数と際立った相関を示した。この因子は，自己志向的動機と他者志向的動機を対置せず，「自分のために努力すると他者のためにもなる」，あるいは「他者のために努力することが最終的には自分のためになる」という認識を反映する。そして 2 つの達成動機を統合して捉えている人は，(1)親から「夢に向かって頑張ってほしい」という自己実現と「人の気持ちがわかるような人になってほしい」という社会的受容に対する高い期待を認知する，(2)就業動機として貢献志向（人の役に立ちたい）が強い，(3)周囲の他者に対して日常的に感謝を感じやすく，他者から感謝された経験も多い，(4)感謝感情が直接幸福感につながっている，（5）高校時代を回顧させた際の学業への動機づけの高さと関連する，ことが明らかにされ，達成動機づけの適応的なあり方の 1 つと考えられた（伊藤,2014 他）。

一方，援助行動や思いやり行動，ボランティアのような向社会的活動の生起過程を検討する研究でも，利己的動機（自分のため）と利他的動機（他者のため）の対比が問題とされる（高木・竹村,2014）。例えばボランティア活動には，利他心，社会的な責任，義務の感覚など利他的な動機と，知識習得，自己成長，自尊心の高揚などの利己的動機が報告される（伊藤,2013）。またボランティア活動の継続者は，自分への肯定的な影響も自覚しており，利己的と利他的の双方の動機づけに支えられていることを指摘する。しかしボランティア活動に謝礼を支払うことの影響の是非は明らかではない。内発的動機づけのアンダーマイニング現象のように，向社会的動機に報酬を付与することが利他的な自発的動機づけを損なうことも指摘される。またボランティアの動機として自分や自分の肉親が世話になったことへの「お返し」という互恵的な動機も語られる（伊藤,2012）。利己的動機と利他的動機の間の関係づけ方の個人差が，向社会的行動への動機づけの様態やその捉え方自体に影響を及ぼすことが予想される。

２．研究の目的

人格の生涯発達や文化的差異を，「自己」と「他者（社会）」の二分法とその統合過程で捉える試みはいくつかあり（伊藤美奈子,1998），行動や心理的適応について議論されているが，動機づけ過程自体をこの枠組みで詳細に検討した理論はほとんどない。対置される 2 つの志向性の葛藤ないし統合を概念化し測定するために，本研究では目標を階層的な認知構造(Moskowitz, 2012)と 捉える理論を援用する。この理論では目標と手段の階層構造において，複終局性（multifinality；１つの行動が複数の目標に向かわせる状況）や等至性（equifinality；複数の手段が１つの目標に寄与する状況）が概念化されている。本研究では，2 つの目標が統合されている状況とは，階層構造での複終局性の状況と捉える。また 2 つ目標が葛藤する状況とは，この階層構造で個々の目標を満たす手段が独立しており，時間や労力など限られた資源を奪い合う状況と見なすことができる(図 1)。先に述べたボランティア経験者は，自分の活動が自己志向的な目標と他者志向的な目標のいずれにも寄与するため，2 つの動機を対立させて捉えてはいないと見なす。

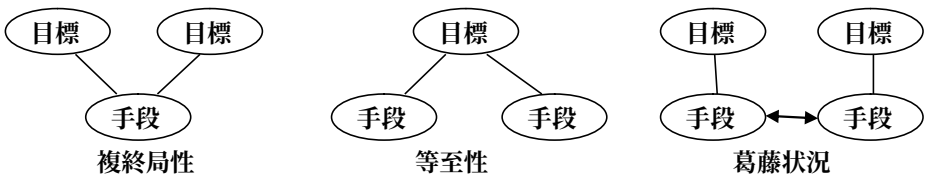

図 1 目標と手段の階層構造

本研究では，自己志向的（利己的）動機（目標）と他者志向的（利他的）動機（目標）が統合しているとはどのようなことか，それは適応的な意味を持つと考えるべきか，どのようにして統合に至るのか，を research questions とする。この疑問に答えるため，以下の目的に基づいて研究を実施した。

(1)階層的目標構造の理論に基づき，動機（目標）間の葛藤・統合を記述し測定する方法を確

立し，その妥当性を検討する。
(2)自己志向的（利己的）動機（目標）と他者志向的（利他的）動機（目標）が統合している状態が心理的適応に果たす役割と，葛藤・統合状況の個人差を生起させる要因について探索的に検討する。
(3)クラスター分析によって，自己志向的動機と他者志向的動機の葛藤・統合の典型的なタイプを抽出する方法は，サンプルによって安定したクラスターが形成されないため，結果の解釈に曖昧さを残している。そこでクラスター数の異なるモデル間を比較する潜在カテゴリー分析を行うことで，妥当なクラスター数を推定し，その上で各クラスターの特徴から，自己志向的動機と他者志向的動機の両者が葛藤している群および統合している群の存在を確認する。
(4)従来の自己・他者志向的達成動機研究は大学生のサンプルに基づいている。人格の生涯発達を「自己」と「他者（社会）」の二分法とその統合過程で捉える理論では，成人期において自己志向性と他者志向性の双方が高まるという結果から両者の統合を成熟と捉える観点が示されている。動機づけにおいても同様の結果が示されるかどうかを成人のサンプルを対象に研究を行って確認する。

３．研究の方法
(1)目標構造のあり方を調べる方法に関する研究 1
目標や願望，欲求とその達成手段は，上位の長期的・抽象的目標に対して下位のより近接的・具体的な手段が結合する階層構造を構成すると仮定できる。しかし目標の内容，数，抽象－具体性のレベルは個人差が大きく，測定の状況や方法によっても影響を受ける。そこで，目標階層のあり方を明らかにする方法について探索的に検討する。
研究参加者　大学生 4 年生 19 名（男性 14 名；女性 5 名）。
手続き　①目標内容の産出：参加者に対してこれから 5 年ないし 10 年先の自分にとっての目標を 10 個，市販の「単語カード」に 1 個ずつ記述させた。②価値内容の産出：人生を生きていくにあたって大切にしていることを 5 個，先ほどと同じカードに 1 個ずつ記述させた。③目標の重要性評定：10 個の目標のカードを自分にとっての重要性に従って並べさせ，その後で重要性を「最も重要」から「ほとんど重要でない」までの 5 段階で評定させた。④価値と目標の関連づけ：10 個の目標のカードを 1 つずつ示して，その価値を充実させたり実現させるためにその達成が役に立つと考える目標を全て挙げさせ，それらの目標の有効性について 5 段階で評定させた。この手続きを 5 個の価値のカードに繰り返し，それぞれの価値の実現に個々の目標がどのように役立つのかを説明させた。⑤目標の実現可能性・自己志向性・他者志向性：10 個の目標の実現可能性を 5 段階，「自分のため」であるかの自己志向性，「周りの人のため」であるかの他者志向性の程度を 5 段階で評定させた。⑥価値の充足度と葛藤：5 個の価値について，現在の充足度を 5 段階で評定させた。最後に 5 つの価値の中で対立していたり，両立が困難な関係にあるものの内容を説明させた。
(2) 目標構造のあり方を調べる方法に関する研究 2
研究参加者　大学生 37 名（男性 14 名，女性 23 名）
手続き　①日常的な具体的活動の算出：普段の生活で行っている具体的な活動を，「大学での勉強」，「大学外での勉強」，「部活動／サークル活動」，「社会的活動」，「個人的活動」の枠組みに沿って具体的に記入させ，これらの活動に対する時間やエネルギーの相対的な投資量を評価させた。②活動の目標の算出：次に上記の活動それぞれについてその目的／理由を最大 3 つまで記入させ，これら目的／理由を内容が似ているものをまとめてグループを作らせ，さらに自分の目標としての名前を付けさせた。そしてこれらの目標の自分にとっての重要性を 5 段階で評価させた。③理想自己の算出：次に理想自己を記述する形容詞 28 個（小平,2000）より，自分の理想自己に当てはまるものを選択させ，その際にイメージした理想自己を，これら形容詞をグルーピングすることで表してもらい，名前を付けさせた。その際，複数ある場合には個別に表すことと形容詞は重複してもよいことを教示した。④目標と理想自己の関連づけ：目標の各グループと理想自己の各グループの関連性を 5 段階で評価させた。最後に多次元自我同一性尺度(谷,2001)20 項目とメンタルヘルス尺度（松原・宮崎・三宅,2006）より抜粋した 9 項目に 7 件法で回答させた。
(3)階層的クラスター分析による自己・他者志向的動機の葛藤・統合の様態の確認
自己・他者志向的達成動機への態度尺度（改訂版）について階層的なクラスター分析と潜在カテゴリー分析を実施することで，先行研究で示唆された 4 ないし 6 のクラスターに対して，その数と内容が再現されるかどうかを確認し，クラスターの設定の妥当性を検討することを目的とする。
研究参加者　大学生 294 名（男性 70 名，女性 219 名，未記入 5 名；平均年齢 18.8 歳）。
手続き　5 つの下位尺度各 5 項目によって構成されている自己・他者志向的達成動機への態度尺度（改訂版）（伊藤,2012）を 4 件法（まったくあてはまらない，あまりあてはまらない，少しあてはまる，とてもあてはまる）で回答させた。
(4)動機づけにおける自己志向的動機と他者志向的動機の統合の発達過程の検討
自己志向的動機と他者志向的動機の発達的変化過程については，発達に伴い両者が統合される方向で変化するという仮説と，2 つの動機が人生の重要な局面で葛藤と統合を繰り返すという仮説が考えられうる。

研究参加者　インターネット調査会社に登録をしている社会人 20～29 歳 150 名（男性 63 名，女性 87 名），40～49 歳 150 名（男性 69 名，女性 81 名）。

手続き　自己・他者志向的達成動機への態度尺度（改訂版）（伊藤,2012）を 4 件法で回答させた。仕事で重視する価値（人間関係，経済的水準，他者評価，効率性，社会貢献，達成）を尋ねる 18 項目を 5 件法で，生きがい意識尺度（今井・長田・西村,2012）9 項目を 5 件法で回答させた。

４．研究成果

(1) 目標構造のあり方を調べる方法に関する研究 1

①目標：190 個の目標は，仕事に関する目標（11%），金銭や購入物に関する目標（19%），自己成長や技能獲得に関する目標（18%），将来設計に関する目標（16%），人間関係と他者からの評価に関する目標（20%），抽象的内容（幸せ，充実，後悔しないなど）（4%），具体的行動（12%）の 7 つのカテゴリーに分類した。重要性評定は，抽象的内容（M=4.8），仕事に関する目標（M=4.4）が高く，金銭や購入物に関する目標（M=2.8），自己成長や技能獲得に関する目標（M=3.1）が低かった。自己成長や技能獲得に関する目標は，評定の分散が大きかった。また目標は他者志向的目標（M=2.8）よりも自己志向的（M=4.0）に評定されたが，人間関係と他者からの評価に関する目標は他者志向的に評価された（M=3.9）。②価値：95 個の価値は，挑戦や自己成長（13%），一人の時間や趣味（8%），人間関係や他者に対する態度（31%），金銭，出世（5%），「自分に正直でいたい」，「悔いを残さない」など自分に向けられた意識や態度（14%），「時間を大切にする」など行動指針（16%），その他（14%）の 7 つのカテゴリーに分類した。価値と目標の結合数は，1 目標あたり平均値 1.6，標準偏差は 0.9 であった。参加者ごとの平均値は，最大値で 3.9，最小値で 0.4 あり，参加者間の差異が著しく大きかった。180 個の目標における重要性評定と結合数の相関は.31 であり，価値と対応づけが多い目標ほど重要と評定されていた。2 つの価値が 1 つの目標を媒介してつながる複終局性は，参加者 1 名あたり平均 14.6 個，標準偏差が 17.5 個であり，こちらも参加者間の差異が大きかった。③葛藤：自己と他者の価値における複終局的な目標の有無を検討した。7 つの価値のカテゴリーのなかで「人間関係や他者に対する態度」対「挑戦や自己成長」・「自分に向けられた意識や態度」の組み合わせ 22 組中，6 組の組み合わせで葛藤が報告され，うち 3 組で複終局的な目標が存在していた。葛藤が報告されなかった 16 組うち 10 組で複終局的な目標が存在していた。例えば，「縁を大切にして生きていたい」と「新しいことにチャレンジし続ける人でいたい」という価値の実現に「社会人として自分自身が必要とされる人物になりたい」という目標が結びつけられていた。一見対立する価値を複終局的な目標によって結びつけて説明する事例は，アイデンティティ発達における「自己」と「他者」の葛藤と統合のプロセスの理解において重要であると考えられる。具体的なレベルでの目標や抽象的な価値を表現することに慣れていないため，目標階層構造で研究者が想定するレベルでの回答を引き出すことが非常に難しく，手続き上の工夫を必要とすることが今後の課題と言える。

(2) 目標構造のあり方を調べる方法に関する研究 2

①各測定指標のレンジと平均値：記述された普段の具体的な活動の数の平均は 8.3 個（最大 18 個，最小 4 個）であった。1 人あたりのこれらの活動における目的／理由の数の平均は 14.7 個（最大 31 個，最小 6 個）であり，この目標／理由をグループ化してまとめられた活動の目標の数の平均は 5.2 個(最大 9 個，最小 2 個)であった。またこれら目標ごとに評定させた重要度の個人ごとの平均値の平均は 3.6（最大値 4.5，最小値 2.6）であった。理想自己を表すものとして選択された形容詞の数の平均は 16.6 個（最大 27 個，最小 7 個）であり，これらの形容詞を選択してグルーピングすることで構成された理想自己の数の平均は 2.5 個（最大 5 個，最小 1 個）であった。各理想自己と各目標のすべての組み合わせについて評定された関連性の個人ごとの平均値の平均は 2.8（最大値 4.0，最小値 1.5）であった。②適応指標との関連：目標構造に基づく目標と理想自己に関連する上記の指標と，適応状態に関連すると考えられる多次元同一性尺度の 4 つの下位尺度（自己斉一性・連続性，対自的同一性，対他的同一性，心理社会的同一性）およびメンタルヘルス尺度の「学業に対する不安」と「学校への適応」に関連する項目群との相関を検討した。.3 以上の大きさの相関が認められたのは活動数と対自的同一性(.33)，理想自己数と不安(.33)，理想自己の形容詞数と対他的同一性(.31)および心理社会的同一性(.52)であった。目標の重要度の平均値および理想自己と目標の関連性の平均値の 2 つの指標については，.30 を超える相関係数は認められなかった。探索的に 6 つの適応指標をそれぞれ目的変数，目標数，理想自己数，理想自己の形容詞数，目標の重要度の平均値，理想自己と目標の関連性の平均値の 5 つを説明変数とする重回帰分析を行った。心理社会的同一性に対しては理想自己の形容詞数（標準偏回帰係数.69,p<.01）と理想自己と目標の関連性の平均値（-.32,p<.10）が予測し，学業に対する不安に対しては理想自己数（,37,p<.10）が予測し，学校への適応に対しては目標数(.35,p<.10)，目標の重要度の平均値（.37,p<.10），理想自己と目標の関連性の平均値（-.46,p<.05）が予測していた。

(3) 階層的クラスター分析による自己・他者志向的動機の葛藤・統合の様態の確認

①因子分析による尺度の構造の確認：確認的因子分析を行ったところ，適合度指標は $\chi 2(265)=585.52$，GFI=0.86，AGFI=0.83，RMSEA=0.064 であり，十分な値とは言えなかった。そこで潜在因子から項目へのパス係数が 0.45 に満たない 6 項目を削除したが，適合度指標は，$\chi 2(142)=337.67$，GFI=0.89，AGFI=0.86，RMSEA=0.069 であり，十分とは言えなかった。潜在変数間の相

関係数の推定値は,「負担感」と「動機の統合」(.76),「負担感」と「利己性認知」(.69),「利己性認知」と「動機の統合」(.50)に高い正の相関,「自己志向重視」と「他者志向重視」に高い負の相関(-.55)が推定された。最終的に「自己志向重視」4 項目,「他者志向重視」3 項目,「負担感」3 項目,「利己性認知」4 項目,「動機の統合」5 項目の計 19 項目を下位尺度項目とした。②クラスター分析による回答者の分類:ウォード法による階層的クラスター分析を行い,デンドログラムを参照し,4 クラスターもしくは 6 クラスターを採用するのが適当と判断した。4 クラスターの場合,第 1 クラスターは自己志向的な平均群,第 2 クラスターは自己志向重視のみが高い自己志向達成動機群,第 3 クラスターは他者志向的な平均群,第 4 クラスターは他者志向重視と動機の統合が高いが,負担感や利己性の認知も高い他者志向アンビバレント群であった。6 クラスターの場合,4 クラスターの第 1 クラスターと第 4 クラスターがそれぞれ 2 つのクラスターに分かれた。第 1 クラスターは自己志向的な平均群,第 2 クラスターは自己志向的動機を非常に重視し,他者志向的動機に負担感や利己性を強く認識している自己志向強調他者志向否定群,第 3 クラスターは自己志向達成動機群,第 4 クラスターは他者志向的な平均群,第 5 クラスターは他者志向的に最も強く動機づけられ負担感や利己性の認知が低い他者志向強調群,第 6 クラスターは負担感や利己性の認知も高い他者志向アンビバレント群であった(図 2)。

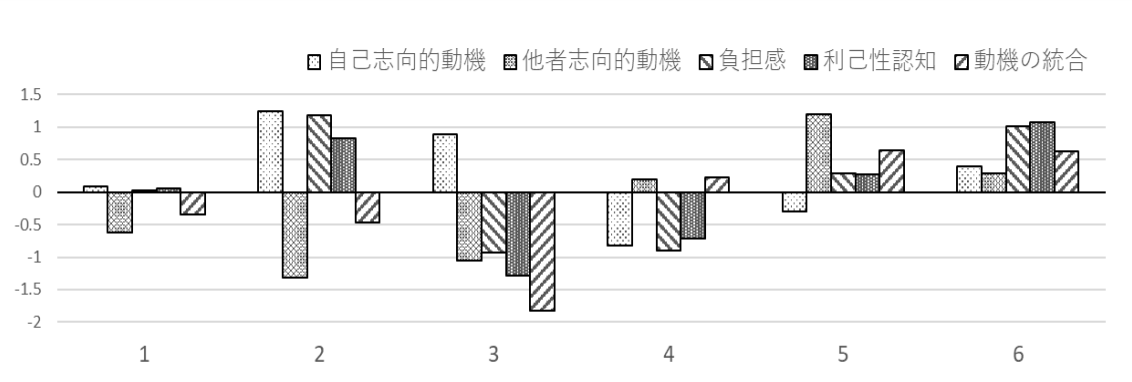

図 2　各クラスターの下位尺度標準得点の平均値(6 クラスター)

あらかじめカテゴリー(クラスター)の数を仮定したモデルに基づく潜在カテゴリー分析では,いずれの適合度指標もクラスター数が 5 のときに最もあてはまりがよいことを示していた。第 1 クラスターは他者志向的動機が低い自己志向的な平均群,第 2 クラスターは自己志向的動機が高く他者志向的動機に関する得点は低い自己志向達成動機群,第 3 クラスターは他者志向的動機の負担感や利己性が強く 2 つの動機の統合的視点も保持している他者志向アンビバレント群,第 4 クラスターは負担感や利己性を認知していない他者志向強調群,第 5 クラスターは他者志向的動機と動機の統合が最も高い動機統合群であった。他者志向的達成動機をめぐるクラスターは,他者志向的達成動機の高・低と他者志向的達成への認知の肯定・否定の 2 つの軸に,自己志向的達成動機の高・低を加味して解釈できると考えられる。

(4) 動機づけにおける自己志向的動機と他者志向的動機の統合の発達過程の検討

参加者全体及び年代ごとに自己・他者志向的達成動機への態度尺度に対して探索的因子分析を行ったが,大学生で得られた 5 因子より少ない因子での解釈が妥当とされる結果であった。この結果は項目間の相関,さらには因子間の相関が大学生とは異なることを示唆する。大学生と比較するために,(3)の研究で確認された項目により 5 つの下位尺度を構成し,(3)のデータと合わせて性別(2)×回答者(3)の分散分析を行った。他者志向重視,負担感,利己性認知,動機の統合の 4 つの尺度で回答者の主効果が 1%水準で有意であった。他者志向重視は 40 代が高く,負担感,利己性認知,動機の統合は大学生が高く,いずれも 20 代が低かった。よって他者志向的達成動機を重視する傾向が成熟に伴って高くなる可能性が示唆されたが,動機の統合に至るという仮説は支持されなかった。他者志向重視および動機の統合は,仕事における人間関係,他者評価,社会貢献,達成の価値の重視と.40 以上の相関が認められた。また社会貢献と達成の相関が非常に高かった(全体.82;20 代.86;40 代.75)。この結果は仕事において自己と社会が同時に志向されることを示す興味深い結果である。生きがい意識の 3 つの下位尺度を基準変数,世代(ダミー変数)と態度尺度の 5 つの下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。生きがい意識のなかで「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」と「自己存在の意味の認識」に対しては他者志向重視の標準偏回帰係数が最も大きく説明力が高かった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊藤忠弘	４．巻 64
２．論文標題 大学生の目標階層に関する探索的研究	５．発行年 2017年
３．雑誌名 学習院大学文学部研究年報	６．最初と最後の頁 105－123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤忠弘	４．巻 66
２．論文標題 他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ：階層的クラスター分析と潜在カテゴリー分析による検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 学習院大学文学部研究年報	６．最初と最後の頁 143-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 伊藤忠弘
２．発表標題 目標階層構造における目標間の葛藤と統合
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊藤忠弘
２．発表標題 大学生の目標階層に関する探索的研究 -面接法による検討-
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考